食卓で使う今月の作物

ゴボウ

burdock

ゴボウは、古く中国から渡来して各地で品種改良されてきました。食物繊維が豊富で、整腸作用など他の野菜に無い特徴があります。

栽培のポイント

①排水のよい畑を選びましょう

真っすぐな根を伸ばすために、排水のよい畑を選びましょう。過湿により根の先が腐ると、そこから分岐します。また、連作は生育を悪くするので4～5年は間を空けましょう。

②酸性土壌は石灰を忘れずに

酸性の土壌を嫌うので、あらかじめ石灰資材を施しておきます。70～80㎝くらいまで深く耕し、丁寧に土を砕いておきましょう。

③種子の特徴と準備

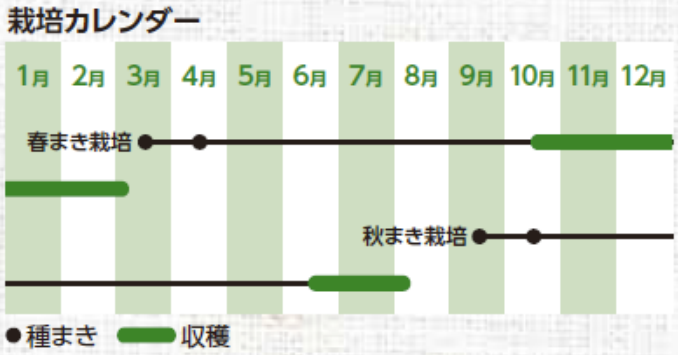
ゴボウの種は発芽しにくいので、水に一晩浸けてから播きます。また、発芽時に光を必要とするので、覆土はごく薄くします。

品種例
「柳川理想」「滝野川大長」「サラダむすめ」など

根が直径1cmくらいに育った頃から若ゴボウとして、順に春先まで収穫を楽しめます。

佐用営農生活センター
営農指導員（TAC）
豊永 雅典

栽培カレンダー



いまさら聞けない農作業のコツ!

半促成栽培

半促成栽培とは、育苗期や生育の初めに保温や加温をして、収穫を早める作型です。電気で苗床を温めることが一般的ですが、堆肥の発酵熱を利用した温床づくりをご紹介します。

●材料

コンパネ・落ち葉や藁など植物性の堆肥材料（動物性の堆肥を使うとアンモニアガス障害の恐れがあります）と米ぬかや油かす

●作り方

ハウス内に20～30㎝の溝を掘り、コンパネを立てて枠を作ります。その中に堆肥の材料を入れてよくかき混ぜます。最後に、全体に水をひたひたになるようにかけ、足で踏み固めたら育苗ベッドの完成です。

発酵が始まると1～2週間のうちに50℃以上になるので、その後約30℃まで温度が下がったら育苗パレットやポットを温床の上に置いてタネを播き、全体をビニールで覆って保温します。ビニールを開閉しながら温度調節することで2ヶ月ほどは30℃を維持できます。

苗を畑に定植した後は、堆肥を使うことができるので電気代もかからず一石二鳥です。

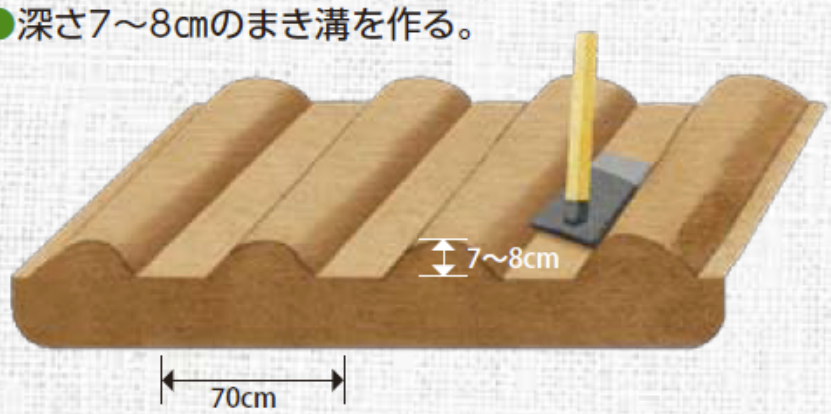
キリトリ線に沿ってお切りください

1 種まきの準備

●根が素直に伸び、掘りやすいゴボウを作るには、深い耕土にしておくことが、一番大切です。深さ70～80cmに掘っておきましょう。

●1㎡当たり石灰大さじ3～5杯、過リン酸石灰大さじ3杯をまき、耕しながらよくならす。

●深さ7～8cmのまき溝を作る。

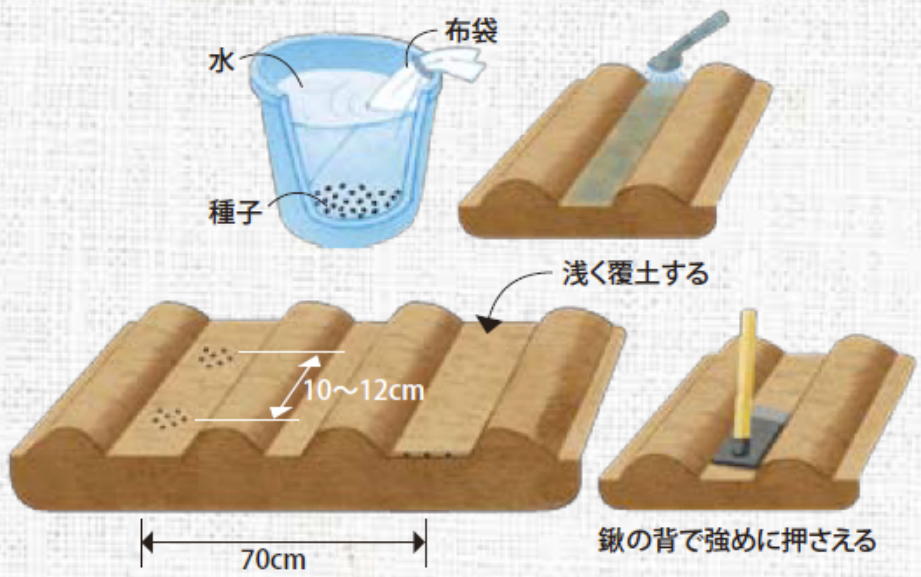


2 種まき

●まく前にまき溝全面に潅水しておく。

●1カ所に6～7粒まき、種がやっと見えなくなるくらい浅く覆土する。

●覆土した後、鍬の背で強めに押さえ、種が雨に流されないようにする。



3 間引き

●本葉1枚のころ2本立てに間引く。

●本葉3枚のころ1本立てに。

間引きのときのよい株の見分け方

良:葉が上方に向かって素直に伸びているもの。

不良:葉が広がって育ちの遅いもの、勢いがよすぎるもの。

良
根もまっすぐに伸びている

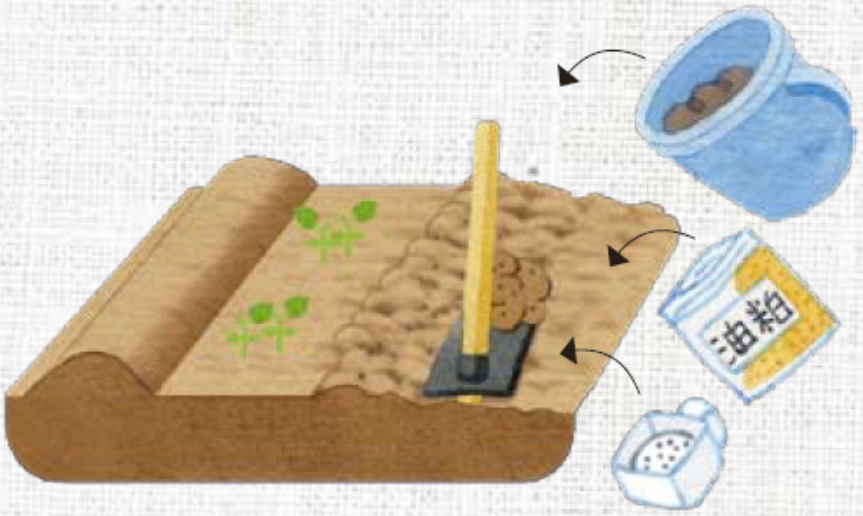
不良
根がまた根や変形している。根が太っていない。

4 追肥

●第1回の間引きが終わった後、畝の肩を切り崩し、完熟堆肥5～6握り、化成肥料大さじ3杯、油粕大さじ2杯(畝の長さ1m当たり)を施して土を返し、畝を形づくる。

●第2回間引き後、第1回目と反対側に化成肥料大さじ3杯、油粕大さじ3杯(畝の長さ1m当たり)をまく。

●本葉5枚のころ、2回目と同じように追肥する。



5 収穫

●家庭菜園では早いうちから若ゴボウとして収穫し、大きく育ってからも冬を越して逐次掘り取り、長い間収穫を楽しむこともできる。

●10月下旬ころから掘り始める。葉が枯れ始める12月ごろから本格的な収穫期。3月ごろまで収穫できる。

若ゴボウ
茎の径が1cmくらいに育ったころから収穫できる。

通常のもの

葉があるうちは刈り取ってから掘る。

できるだけ先端まで掘り取る。そのための用具もある。大量のときは機械(トレンチャー)で作業する。

キリトリ線に沿ってお切りください